

第二百二十八話 暗黙の戦域分担が事態を悪化

重大戦局時にも、支那大陸は陸軍、太平洋正面は海軍との暗黙の戦域分担に陸海軍ともに拘っているやに見える。悪く言えば、縄張り主義だ。特に、太平洋正面に対する陸軍の態度は、慎重且つ冷たい。また、各軍種の特性とはいえ、戦略思想の差異は埋め難いのもかもしれない。それが顕著に表れたのが太平洋正面である。

1 太平洋における海軍戦略と陸軍の関与（煩瑣を厭わずに記述する。）



海軍は、初期進攻作戦（あ号作戦）で海軍第一段作戦を、次いで「今後採るべき戦争指導の大綱」（1942/3/7）後に積極攻勢を旨とする海軍第二段作戦を策定（1942/4/15）した。然しながら、ミッドウェー海戦の惨敗（1942/6/5）とガダルカナル島の放棄（1943/2/7）により本作戦は中止された。ここに至って、陸海軍は共に、新たな作戦計画を策定した。海軍は第三段作戦を策定（1943/3/25）し、陸軍は「昭和18年度帝国陸軍総合作戦計画」を策定（1943/2）した。

両計画とも、速やかに南太平洋方面の作戦を完遂すると共に南西（ビルマ等）方面への反攻を撃破して帝国自彊必勝の戦略態勢を確立するというものであった。

陸海軍統帥部は、南東方面作戦の合同研究を行ったが、戦線後退案を主張する陸軍とそれに強硬に反対する海軍との考え方の差は埋められなかったが、最終的には、「南東方面作戦陸海軍中央協定」を締結（1943/3/22）した。この協定によって、陸海軍一体となって作戦することとされ、陸軍航空戦力を投入して本格的な協同を行うこととなった。また、中部ソロモンへも逐次に陸軍部隊を増強し、第8連合特別戦隊司令官の指揮下に入れた。が、南東方面の作戦は、作戦目的を達成できないままに戦局困難の度を深め、戦力を消耗してしまった。

昭和18年後半に至り、陸海軍統帥部は、ビルマ正面、支那正面等好転の見込みなく、戦局挽回に苦慮していた。現戦線の防衛は日本の国力の限界を超えるものだとし、絶対確保すべき後方要線への後退論が力を増してきた。

陸海軍統帥部は、陸海軍間の意見の相違はそのままに、「今後採るべき戦争指導の大綱」を御前会議に奏請し、允裁を受けた（1943/9/30）。絶対国防圏を中核として敵の反攻を阻止するという防勢戦略への転換である。

これより先、連合艦隊は第三段作戦要綱及びこれに基づく邀撃作戦要領（〔Z作戦〕要領）を発令していた。新作戦方針に基づき、中、南部太平洋方面作戦陸海軍中央協定及び南東方面、北東方面の各中央協定が結ばれた。

陸軍側は、空白に近かった絶対国防圏への陸軍兵力の増強を図ったのだが、時既に！。

2 若干のコメント

- (1) 陸海軍統合組織の欠如故の中央協定の締結の煩雑さ
- (2) 陸軍には太平洋正面は海軍担任との意識や、海軍から得た情報から太平洋正面の情勢は楽観との認識があり、陸軍部隊の転用に大分慎重だった。
- (3) 陸軍航空部隊の太平洋での運用には困難があった。抑々陸軍航空機は大陸（対ソ）での運用を前提としており、且つ太平洋上の作戦に應ずる訓練も間に合わなかった。
- (4) 陸海軍種間における作戦思想の溝は埋めることが出来なかった。長期持久態勢構築或いは敵との間合いを切つての態勢立て直しを考える陸軍と、飽くまでも積極攻勢或いは前方での邀撃を追求する海軍の考えの差異を残したままの作戦となった。
- (5) 陸海軍間の情報の共有というか正確な情報の相互提供がないことによる戦況の誤判断もあり、徹底的に意見の相違を埋めるべき場もあったとは言えない。
- (6) 建軍来の帝国国防方針分裂の悪弊が太平洋戦線の悲劇に繋がったのではないか。

(了)